今月の安全運転管理

定刻でピカッ!　事故の芽を摘む　ライト点灯

①確実なライト点灯を指導しよう

○ライト点灯時刻を指導しよう

○西日対策を忘れずに

②9月8日の豪雨災害の教訓を活かそう

○豪雨時の危険とその対応を指導しておこう



ライト点灯時刻を指導しよう

秋から冬にかけては、アッという間に日が落ち暗くなります。「まだ見えるから」と油断していると、歩行者等を見落として事故につながります。

そこで、運転者に対して早めのライト点灯を呼び掛けましょう。このとき日没の三十分前などの基準を決めておき、「午後四時三十分にライト点灯」といったように、具体的な点灯時刻を伝えましょう。

くわえて、ダッシュボードにライト点灯時刻を記載したステッカーを貼付するなどして点灯忘れを防止しましょう。

早めにライトを点灯することは、危険の早期発見に役立つだけではなく、歩行者などに自車の存在をアピールすることにもつながります。

西日対策を指導しよう

この時期は西日にも注意を払う必要があります。西日に眩惑されると、前車や信号が見えなくなり、追突や信号無視による事故の危険が高まります。

西日が眩しいときは、サンバイザーやサングラスを活用するとともに、スピードを抑えて十分な車間距離を保って運転するよう指導しましょう。

また、管理面では西日を避けた運行ルートの設定といった対策を講じておきましょう。

豪雨の危険とその対応を指導しておこう

九月八日、東海地方は記録的な大雨に見舞われました。線状降水帯が発生した名古屋市では、一時間あたりの雨量が観測史上最大を記録しました。

この豪雨では、家屋等の被害のほかに、各地で道路が冠水し、多数の車の立ち往生が発生しました。

車は雨に強い印象がありますが、JAFの実験では、水深六十センチの道路へ時速四十キロで進入したところ、車種によってはエンジンが停止して走行不能になりました。

また、水深が床面を超えると電気装置が損傷し、パワーウインドウ等が作動しなくなるおそれもあります。

こうした豪雨時に車を運転することの危険を周知するとともに、安全最優先の行動をとることを指導しておきましょう。

また、万が一の立ち往生に備えて脱出用ハンマーの携行を促してください。

近年の自然災害は被害が大きくなりがちです。今回の教訓を活かして、豪雨時の被害を最小限にとどめる取組みを実施しましょう。